

平成17年度 道徳教育研修の報告書

安永三郎

はじめに、私は道徳教育なるものは高等学校には改めて出てくるものではなく自然と形、呼び方を変えて出てくるものだと感じていた。たとえば、高等学校の性教育の講話（性教育ロング）、人権教育、教育相談、生徒指導（生活指導）、保健、「産業社会と人間の授業」、「職業体験」、「ふれあい運動」、地区懇談会、文化祭への保護者参加、等々学校全体の教育活動を通して実施されるものであるということを感じていた。しかし、それらは独自では存在しない。お互いが道徳教育と関係しあってそれらが存在する。学校における道徳教育として、生徒が自己探求と自己実現に努めながら推進していく。すべて道徳教育という教育基本法および学校教育法に定められた教育の根本精神に基づいて、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を具体的な生活の中に生かして未来を拓く主体性のある日本人を育成するための基盤としての道徳性を養う。そう言う意味で道徳教育という言葉を最初に据えてこないと教育目標もちぐはぐになってしまわないか危惧するところである。

ある本がある。「ヤンキー先生の教育改革」義家弘介著。私は時を同じにしてたまたま購入し読んでいた。その中に今の教育は、「教育」ではなく「矯正教育」だといっている。教育とは、人間に他の意図を持って働きかけ、望ましい姿に変化させ価値を実現する活動とあった。後者は、非行を犯し、またおそれのある人を矯正し社会の一員として復帰させる教育とあった。まさに今の若者達はスタートが違いすぎているという感じを受ける。非行を犯しあるいは犯しそうな生徒に対して間違いであることを知らせる。それはそれで立派な教育であるがそこで終わってしまっている。最初にいったように人間に他の意図を持って働きかけることができる。そこがスタートである。その働きかけによって、生徒の心の中を揺さぶることができるかが勝負である。そしてその結果として自分の人生を切り開いていく能力、生徒が生きていく基本能力つまり価値観が育っていればいいのである。

「高等学校における道徳教育の在り方」金井 肇先生の話の中で、道徳教育の中で自分が教えるときにどちらが道徳教育なのか。立派な行いを教えるのか。人間としての自分なりの生き方を作ることを教える。どちらですか？という質問をされた。これは8：8に分かれてしまった。ちなみに私は後者の人間として自分なりの生き方を作るに挙手をした。私としてはどちらも道徳教育であるが前者は小学校の低学年から中学年くらいまでに終えていることが望ましいと思う。それから先は生き方を作る学習であると思う。自分なりの、人間としての生き方を……。人と関わる中でコミュニケーション能力を育て、自分の人生を描くことをしていく。また、先生は道徳教育を鏡餅にたとえられたが、これがまた非常にわかりやすい説明であった。下の餅は人間の欲・感情・感覚などでこれらは先天的なものである。もってうまれたものであり、成長とともに分化して大きく強くなる。上の餅は正しいとか美しいなどの後天性のものであり価値意識である。これは生まれたときには

ゼロであり教育によって成長するものである。育てなければ育たないというものである。スタートは人間の欲・感情・感覚などの問題でそれらが人生観・価値観になるまでに心を通るか通らないか。大きい心を通るか、小さな心を通るかの違いである。できればそれ相応の餅であることがよいと思う。まさに道德の授業がイメージ化しやすいようになさなければならない。

そういう価値観を育てることが大切で、万引きとかポイ捨てなどは人間としての誇りを持ってないからである。価値の教育をするから心（個性）も育つといえる。同じものを考えるにしてもそれはあくまでも自分自身の考えであり、相手の立場にたつと見えなくなる場合がある。ゴミを拾おうとした生徒を先生は怒るということもある。人間は自分の立場で山を見てもいろいろな見方、とらえ方をするということである。今までの自分は教員側の考え・見方にたっていた。いや、たとうとしていたのかもしれない。でもいろいろな見方・考え方が有るのだ。それを学習して見方・見聞を広げていくことにより、幅の広い人間になれるということである。このように人間のものの見方は有限であることがいえる。これを道德で考えよう。これを育てようとするのだといえる。

ではどうのように価値観を育てるか。内容項目はどうやってできるか。まずは自分自身をしっかりと把握していないといけない。つぎに人々（社会）がいる。つまり集団がある。その集団を包み込む自然がある。そこには人間を越えた力がある。「生命の暗号」で有名な村上先生はそれをサムシンググレートと呼ばれている。

自分の眼を肥やすことが必要である。自分は人々とどういう関係を持つのか。集団とはどういう関係を持つのか。自然・崇高なものに対してどういう関係を保てばよいのか。生きていく上で何が大切なのか。そして自分自身がより好きになる。そういう内容項目で価値観を育てていくものである。このときどういう内容に重点を置いて、どういう内容を軽視しているかということではいけない。人の心に必要な栄養素をすべて食べさせなければいけない。人に好き嫌いが有るようにこのことはおおいに栄養になった、これは余り栄養にならなかった。道德教育に求められるものは考えさせ、心を揺さぶることである。

細木数子曰く、借金を抱え込んで逃げてはいけない。皆、逃げて逃げて犯罪に巻き込まれていくでも逃げ回る。本当は逆なのだ、その借金に立ち向かっていくこと。そこに「生きる」ということにつながる意味が出てくるのだと・・・。

最後に義家氏はこういっている。「光」は必ず「影」を生むということだ。問題をなくすことはできなくても、それに取り組むことによって子供達を成長させることができる。問題に光をあてればその問題は無くなるかもしれない。しかし、影となってまた別の問題として生じていく。必要なのは光ではなく「熱」である。熱を持って取り組んでいこうとすることである。

そう、情熱を持って物事にあたる。この精神こそ今教員に求められているのだといえる。
以上